

記者は「歴史の目撃者」！ メディアで働くということ

朝日新聞社 就活コーディネーター・あさがくナビ編集長 木之本敬介（1980年卒、高校32期）

早稲田大学 政治経済学部経済学科卒

あさがくナビ 朝日学情ナビ

初めての方へ > サイトマップ



「就活力」がグングン身につく

就活ニューズペーパー by 朝日新聞

私がサポートします！

あさがくナビ編集長
木之本敬介



TOP

社会を知る

企業と業界を知る

就活と採用を知る

■歴史は今つくられている

「今まさに歴史が動いているんだ。歴史の目撃者になりたい！」

立高3年生の年末。自宅のコタツで見ていたニュースがソ連軍のアフガニスタン侵攻を伝えました。冷戦時代ながら「デタント」と呼ばれる雪解けの時期でしたが、その日を境に世界情勢は一変。日本を含む西側諸国のモスクワ五輪ボイコットにもつながりました。それまでに学んだ現代史の出来事は、キューバ危機もベトナム戦争も教科書に載っている過去の一コマに過ぎませんでした。このニュースで「歴史は今つくられている」ことを初めて実感して大興奮。なんとなく憧れていた新聞記者になりたいと本気で思うようになりました。

直後の大学受験は、私立文系に絞ったものの全滅。2度目の受験にあたっては、大学ごとの就職先を調べ、他大に比べて圧倒的にマスコミ就職が多い早稲田大学を第1志望に決め、受験勉強漬けの1年を過ごして希望をかなえました。入学してみると、当時の早稲田はメディア関連の教育が特段充実しているわけではありませんでした。「在野精神」を掲げる早稲田には伝統的にマスコミ志望者が集まるため、結果的に就職する人が多いだけだと気づきました（笑）。ただ、周りに「仲間」がたくさんいる環境は貴重でした。大学にはそれぞれの校風、特徴があります。志望校を決める際には、オープンキャンパスに行ったり調べたりして、自分で見極めることが大切です。

バンドサークル活動に明け暮れた学生生活を送り、就活ではテレビ局と新聞社を中心に受けました。しかし、昔から苦手だった作文がネックになり、またも全滅。就職留年して作文を特訓し新聞を毎日読み込んで、翌年、朝日新聞社に合格しました。

■事件事故、高校野球、街の話題、政治…

初任地は青森でした。基本とされる「サツ回り」（警察担当）記者として、事件事故のほか、街や人の話題「街ダネ」を日々取材。高校野球では地方大会に続き、県代表校に同行して甲子園へも行きました。2カ所目の横浜支局では裁判や検察庁、県庁を担当。次に行った東京本社の編集センターにいたときには、ベルリンの壁やソ連の崩壊に遭遇します。紙面のレイアウトと見出しをつける編集記者として、「歴史」を紙面に記録する役割を担いました。

政治部に異動した1993年、長年続いた自民党政権が崩壊し細川連立政権が誕生しました。首相番記者として、「歴史」が変わる瞬間を今度は現場で目の当たりにしました。当時の首相番記者は官邸や国会を歩いている間、首相に直接質問することができました。それまでの宮沢喜一首相は若い番記者の質問にまともに対応してくれず、それが当たり前だと思っていました。ところが、細川護熙首相は就任したその日、官邸から首相公邸に戻る直前、立ち止まって私たちに向き合ったのです。記者一人ひとりの目を見ながら、20分にもわたり丁寧に答えてくれました。記者は読者を代表して取材しています。「新首相は国民に寄り添おうとしている」と感じ入ったのが私にとっての政権交代でした。

長く政治記者を続けた後、社会部や生活部のデスク（現場の記者を指示して記事をまとめる役目）を務めました。優秀な「特ダネ記者」ではありませんでしたが、デスクとして担当した「非正規雇用拡大」の現場ルポは今につながる「格差社会」をあぶり出し、その後の法改正にもつながりました。「社会を良くするためのジャーナリズム」の意義を実感しました。

■名刺1枚で誰にでも会える仕事

新聞記者は名刺1枚でたいいていの人に会うことができます。こんな仕事、めったにありません。「木之本敬介」では相手にしてもらえませんが、その横に「朝日新聞記者」と書いてあるから会ってくれるのです。経験した人はみんな、「記者ほど面白い仕事はない」と言います。私も政治家、社長、芸能人、いろいろな人を取材し、現場に行きました。有名人ばかりではありません。市井の人々の話題も記事にします。人に寄り添い、喜怒哀楽を伝える仕事。同じ取材は二度とないので毎日が新鮮です。紙の新聞の読者は年々減り、ネットの無料ニュースが当たり前になるなど、メディアは大変革期にあります。それでも、「現場に行くと人に会って話を聞いて記事にする」記者の仕事はなくなりません。好奇心が旺盛で、何でも見てみたい、いろいろな人に会ってみたい人、世の中のさまざまな出来事に興味がある人は、記者、ジャーナリストの道を考えてみてください。

「ニュースに興味はあるけど、文章が苦手だから」という人も、心配は無用です。作文嫌いな少年だった私も、毎日書くうちにできるようになりました。週刊朝日の記者のときには、4ページの長文記事に毎週呻吟しました。でも、どうやったら読んでもらえるのか工夫するうち、「ストーリー」を組み立てる面白さに目覚めました。そもそも作家ではないので「美文麗文」はいりません。「どう書くか」より、「何を伝えるか」が大事な仕事です。

■今打ち込んでいることが未来を切り開く

24年間の記者生活を経て採用担当部長に。今はその経験を生かし、就活ナビ編集長として、サイト「就活ニュースペーパーby朝日新聞」を通じて日々のニュースをやさしく解説したり、エントリーシートや面接の指導をしたり、大学生向けに講演したりしています。人気コーナー「人事のホンネ」では有名企業の採用担当者に直撃インタビュー。のべ80社、取材してきました。

最後にクイズをひとつ。採用試験の面接では「未来の夢」や「過去の経験」を聞かれますが、企業がより重視するのはどちらだと思いますか？ 企業が求めるのは将来活躍できる人。面接では、いろいろな質問をして学生の「伸びしろ」を探ります。とすると、「未来」重視でしょうか。ただ、どんなに素晴らしい夢を語っても、未来のことは誰にもわかりませんよね。だから、企業は学生の「過去の経験」を根掘り葉掘り聞きます。将来の可能性を見極めるために「過去」を聞くのです。一番聞かれるのは大学時代ですが、高校時代を聞く会社もあります。

ある採用担当者は「将来的なポテンシャル（潜在能力）は、その人の過去から類推するしかありません。面接官の大事な仕事は、学生が過去にどういうことをしたかという事実を掘り出すこと。志望動機のように事前に準備できるものより、学生が二十数年間でやってきたことを面接の中で引き出したい」と言います。

どんな体験をしてきたのか、なぜそれを始めたのか、壁をどう乗り越え、どう成長したのか。そう、まさに今みなさんが打ち込んでいることです。部活、委員会、立高祭、体育祭、勉強……本気でやったことなら何でもOK。将来の就職を考えて今から準備してと言っているわけではありません。みなさんが今熱中していること、日々悩みながら取り組んでいる体験こそが、結果的に未来を切り開くのです。将来を思い描きつつ、立高生活を満喫してください！



知る就活

木之本 敬介



※いよいよ解禁※

正解でなく「ワクワク」探して

「就活解禁」の翌2日夜、NHK総合テレビ「就活応援TV」にコメンテーターとして出演しました。学生と企業の採用担当者約80人による生トークには、「今どきの就活」が詰まっていました。

「私服の面接が増えています。どんな服で行けば内定につながりますか？」最後に出たこの質問は、今の学生気質を象徴しています。「これを着れば内定！」なんて服があるわけがありません。「自分らしい服」「自信を持てる格好」で行くしかない。そこにあなたの個性が表れます。

参加学生のアンケートで特に多かったのは、面接の最後に聞かれる「逆質問」

について「聞いてほしいこと、聞いた方がいいことはありますか」というものでした。ビール会社の採用担当者は「論理的思考力やバランス感覚を見たくて聞くので、特定の答えはありません」。

エントリーシート（ES）にも面接にも「正解」はありません。採用試験は、みなさんが受けてきた大学受験までの試験とは根本的に違います。選考基準は不明確で、合否の理由も告げられない。学生優位の売り手市場なのに、みんな不安な理由はこの辺にありそうです。

でも、ちょっと考え方を考えてみましょう。数十年続けるかもしれない仕事や

会社を選ぶのが就活です。自分は何にやりがいを感じるのかの「ワクワク」探し。番組には、まもなく入社する4年生も登場し「いろんな会社や業界を知ることができて楽しかった」と口々に語りました。就活生にしかできない会社巡りや、多くの社員に会う体験を楽しめたことが、良い結果をもたらしたのです。

ただ一人で立ち向かうのは大変です。4年生のアンケートで目立ったのは「就活は団体戦」という言葉。説明会や面接に行くうちに知り合いができます。ライバルですが、同じ目標に向かう「仲間」でもあります。家族にも頼りましょう。企

業選びやESのアドバイス、面接の練習相手……。しかし内定後、入る会社は自分で納得して決めること。親の意見は大事ですが、言われるままに入社したら、しんどい時、たぶん踏ん張れません。

このコラムは今回で終わります。サイトの「就活ニューズペーパー」は日々更新しています。ぜひ読んで下さい。

きのもと・けいすけ 朝日新聞社就活コーディネーター。1986年入社、政治部記者、採用担当部長などを経て教育総合本部ディレクター兼あさがくナビ編集長。著書に「最強の業界・企業研究ナビ2017」。

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。